

単位制課程高等学校における大学生ボランティアと高校生の相互作用

— 青年期における自己の変容の観点からの考察 —

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
永田 智弥

今日の学校現場においては未だ多種多様な問題が山積しているが、スクールカウンセラーや適応指導教室の設置など様々な支援や対策も実施されている。その1つとして近年注目されているのが大学生ボランティアであるが、授業運営や学習補助に焦点の当てられた研究がほとんどであり、児童生徒との日常的な関わりに関する知見は乏しい。よって本研究では、大学生と生徒の日常的な関わりにおける相互作用について、それぞれの自己の変容という観点に立ちその意義を考察することを目的とし、単位制課程高等学校の大学生ボランティアとその卒業生の各5名に対してインタビューを行った。

大学生ボランティアにはボランティア活動について、卒業生には学校生活について半構造化面接を実施し、両者から得られたインタビューデータをスクリプトに起こし、M-GTAを用いて分析を行った。大学生ボランティアの語りからは、大学生のできる活動として参加したという【参加の背景】が語られたものの、【入って分かった高校生の姿】に対し理解が難しく、大学生としてもボランティアとしても役に立てない【活動の難しさを痛感する】ことが確認された。しかし、高校生に大学生として受け入れてもらうなどの【支えを得ながらLAとして活動できるようになる】。その経験を通して、自分にできたことが活動であるという【活動の捉え直し】が起こり、等身大で高校生と関わるという【確立したLAとしての関わり方】を通して、大学生自身が人との付き合い方を変えたことなどが、【LA活動がもたらすもの】として明らかとなった。

一方、卒業生の語りからは、不登校になった小・中学校という【自分を生きられなかった時期】があっても、【他者からの助け】を受けて【学校への復帰】を果たすようになったことが確認された。しかし、単位制入学後【思うように行かない学校生活】を送っている高校生も居れば、【良い方向に向く学校生活】を送っている高校生も居ることが確認された。これは、クラスメイトや先生との関係が支えであることも考えられたが、【居心地の良い生徒ホール】で自分を受け止めてくれたり、対等に価値観を話し合うことや大学の話を聴くことができた、【様々に関わるLA】に支えてもらうことによって、高校生の恋愛観や生き方に変化があったことが、【今振り返って思う事】から確認された。

上記のプロセスを統合し自己の変容という観点から考察したところ、両者において価値観の変化や対人関係構築の仕方など、自己を捉え直し変容させている点が見られた。特に、支援される側である高校生の側から、支援する側の大学生を支え、その後大学生が、高校生を支援できるようになるというプロセスが明らかとなった。以上から、不登校経験のある高校生に対し、大学生ボランティアが日常的に関わりを持つことは、両者の自己の変容を支えるものであり、そこに意義があることが示唆された。